



Title	臨床実習におけるコミュニケーション技術育成に関する研究
Author(s)	岩脇, 陽子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47510
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 いわ 岩 わき 脇 よう 陽 こ 子

博士の専攻分野の名称 博 士（看護学）

学 位 記 番 号 第 2 1 0 2 9 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 19 年 3 月 23 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

医学系研究科保健学専攻

学 位 論 文 名 臨床実習におけるコミュニケーション技術育成に関する研究

論 文 審 査 委 員 （主査）

教 授 小笠原知枝

（副査）

教 授 大野ゆう子 教 授 牧本 清子

論 文 内 容 の 要 旨

研究 1

本研究は、臨床場面における看護師のコミュニケーション技術の特徴を非言語的コミュニケーションと言語的コミュニケーションの関係から明らかにすることである。看護師 27 名の臨床場面における患者－看護師間の相互作用 81 場面を撮影した。非言語的コミュニケーション（6 カテゴリー）と言語的コミュニケーション（25 カテゴリー、4 つの機能的スキル）を観察し、行動コーディングシステム（DKH）を用いて分析した。その結果、看護師は主にアイコンタクト、うなずき、受容・一般的リード、治療に関連した情報提供を用いていた。非言語的コミュニケーションと言語的コミュニケーションの関連では、うなずき、微笑と人間関係形成スキルに有意な相関があった。非言語的コミュニケーションと言語的コミュニケーションの前後関係では、アイコンタクトの前後に情報収集スキル、教育カウンセリングスキルが、微笑の前後に人間関係形成スキルが有意に多く出現していた。

以上から、看護師のコミュニケーション技術は、非言語的コミュニケーションと言語的コミュニケーションが相互に補足、促進しながら成り立っていた。言語的コミュニケーションだけでなく、非言語的コミュニケーションに着目したコミュニケーション技術の教育方法の必要性が示唆された。

研究 2

本研究の目的は、臨床場面で看護師が用いているコミュニケーション技術の構成要素を明らかにすることである。面接内容を質的に分析した。対象者は、大学病院の病棟に勤務する看護師 27 名である。倫理的配慮は、倫理委員会の審査を受け承認を受けた。また、文書における同意を得た。データ収集は、2004 年 7 月～8 月で、患者との相互作用の場面を観察した看護師に半構成的面接を行った。

分析の結果、看護師は、患者に応じた『話題の選択』をして、多様な『話し方』を駆使すると同時に『非言語的コミュニケーションの使用』を行っていた。そして、患者との相互作用に、『専門的知識の蓄積』、『時間の捻出』、『看護師自身の基盤の形成』が影響していた。また、看護師は常に『コミュニケーションの基本の実行』を心がけ、患者だけでなく『家族とのコミュニケーション』も行っていた。以上から、臨床場面における看護師が使用しているコミュニケーション技術の構成要素が明らかとなった。コミュニケーション技術の教育に活用する方法が示唆された。

論文審査の結果の要旨

看護実践の基盤としてコミュニケーション技術は重要である。しかしながら、看護教育においては、コミュニケーション技術が臨床場面の患者との相互作用を反映しておらず、臨床実習でのコミュニケーション技術の実践を困難にしている。

本研究は、看護師のコミュニケーション技術の特徴と構成要素を特定することで、臨床実習におけるコミュニケーション技術育成の教育方法について論じたものである。

まず、看護師と患者との相互作用を撮影し、行動コーディングシステム（DKH-IFS）を用いて 81 場面を言語的コミュニケーション（Roter）と非言語的コミュニケーションの関係から分析した。

コミュニケーション技術の特徴として、①言語的コミュニケーションでは受容・一般的リードと治療に関連した情報提供、一方、非言語的コミュニケーションではアイコンタクトとうなずきが頻回に用いられていた、②うなずきと微笑は、人間関係場面で出現率の相関がみられた、③情報収集、教育場面でアイコンタクト、人間関係場面で感情的タッチ、協力関係と教育場面で身を乗り出すが多く用いられていた。以上のように、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションは組み合わせられて実践されていることが特徴であり、これらは看護基礎教育におけるコミュニケーション技術の教育に応用できることが示唆された。

次に、看護師のコミュニケーション技術の構成要素が看護師の語りの分析から特定された。質的分析から 8 つのコアカテゴリー、すなわち【話題の選択】、【話し方】、【非言語的コミュニケーションの使用】、【専門的知識の蓄積】、【看護師としての基盤の形成】、【コミュニケーションの基本の実行】、【家族とのコミュニケーション】、【時間の捻出】などが構成要素として抽出された。これらは、臨床実習におけるコミュニケーション技術育成の教育方法を検討する上で有効であり、また、コミュニケーション技術の測定尺度の開発や教育評価に寄与することが期待される。

本論文は、臨床実習におけるコミュニケーション技術の教育方法を検討する上で有益であり、看護実践の基盤としてコミュニケーション技術の能力向上に貢献すると考えられ、博士（看護学）の学位授与に値するものと認められる。